

38 【ぶあいそがらす】

運動会が近づいてくると、毎早朝、大川の堤で駆けっこの練習をしたものです。

そしてある朝、不審人物を目撃（もくげき）しました。

大川の堤の一番高いところに突っ立っています。

真っ黒い服装です。

帽子を被っていて、それも真っ黒。

近づいてみると、真っ黒いお面までしています。

これはおぼけにちがいないと、ぼくは勝手に【まっくろかめん】という名前までつけて、懐爺のところに行きました。

「【まっくろかめん】ではありませんよ。【まっくろかめん】というおぼけもいますが、それは朝にはでない。金ちゃんがみかけたのはきっと【ぶあいそがらす】ですね」

「からすかい。あさから、からすかい」

「【ぶあいそがらす】は孤独な鳥ですから、仲間が多い夕方には出役しません。【ぶりょうがらす】とも呼びます。無聊とは要するに暇を持てあましているという意味です。暇でたべていけるはずはないのに、とにかく何もしません。飛ぶこともいっさいしません」

「こどくで、ひまかい」

「はい。もう救い様がないくらい孤独で暇なのです。暇なら眠っていればいいのに、何をかんがえているんだか、真っ暗な真夜中でも、川ばかり眺めているんです。そうして、そんな、孤独のかたまり【ぶあいそがらす】を、さびしくみつづけていて、こちらがひどくさびしくなって、川に身を投げてしまう人もいます。この身投げをした水死人も、むかしは【ぶあいそがらす】といわれていました」

ぼくは（いまのも、むかしのも）【ぶあいそがらす】が何となく好きになりました。

「わしがともだちに、なってあげるかのう」

「それはいいですね。わたしだって金ちゃんが、友だちになってくれなかったら、まちがいなく【ぶあいそがらす】になっていたでしょうからねえ」

そして翌朝、大川の堤に行ってみると、どういうわけか【ぶあいそがらす】は両手（両翼というのかもしれないけれども）を大きく広げていました。

飛ぶのかとおもってずっとみていたが、なかなか飛ばない。

心の中で、飛べ飛べと叫んでいたら、飛んだ。

ほんとうに飛んだ。

そして消えてしまったのです。

まがりなりにもおぼけなんだから、まさか大川に落ちたはずではないとおもうけれども、それからは、一度もみたことはないのです。